

(別紙様式 = 中学校用)

都道府県番号	43
都道府県名	熊本県

【 】

学校名及び規模

学校名	熊本県阿蘇郡阿蘇町立阿蘇北中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	1	13	27
生徒数	124	123	123	2	372	

研究の概要

(1) 研究主題

基礎・基本を確実に身につけるとともに、自ら学び自ら考える力をもった生徒の育成
～個に応じたきめ細かな指導の確実な実践を通して～

(2) 研究主題設定の趣旨

新しい学習指導要領から

「自己教育力の育成」「新しい学力観」と言われて久しいが、今回の学習指導要領において、改めていわば「生きる力」の基盤として「基礎・基本の確実な定着と自ら学び自ら考える力」などを中心とした学力を教科の学習で育むことが明示された。

また、学習指導要領に示す各教科の目標・内容は、誰もが身につけるべき最低基準とされ、生徒一人一人の学習状況に適切に対応した授業展開が重要視されるようになり、目標に準拠した評価(絶対評価)が導入された。

今日的な教育課題から

しかしながら、現代の子どもを取り巻く環境はとてつもないものがある。例えば、「不登校」「いじめ」「学級崩壊」、さらには凶悪な「少年犯罪」など憂慮すべき状況が多く、それらの数は年々増加傾向にある。また、「理科離れ」や「分数ができない大学生」などが話題になり、統計からも学生の学習時間の減少や人生の目標意識の低下が目立ち、現代日本の子ども像として「学びからの逃走」とも言える実態がうかがえる。だからこそ、本当の「生きる力」を子どもたちに育む教育実践を積み上げていかなければならないと考える。

本校の教育目標から

本校教育目標は、「人間尊重の精神を基底に、一人一人の可能性を最大限に伸ばし、自主的精神に富んだ心豊かで逞しい北中生徒を育成する」である。本研究の実践を通して、「一人一人の可能性を最大限に伸ばす」ための土台として確かな学力を保障し、また、自ら学び自ら考える力を育み、「自主的精神に富んだ北中生徒の育成」を目指したい。

本校の生徒の実態から

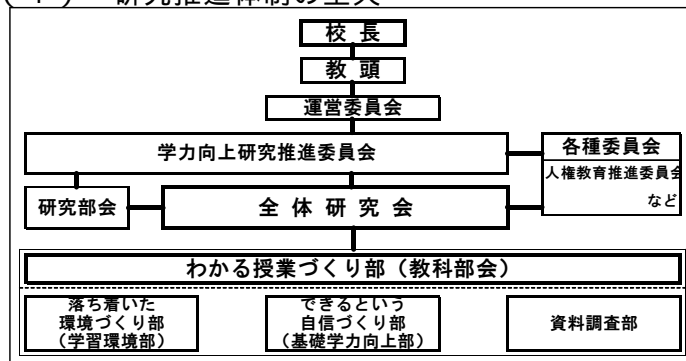
本校の生徒は、とても純朴で、友だちと協力して体育大会や文化祭などのさまざまな行事に意欲的に活動することができる。また、本校の伝統であるノーチャイムやあいさつ運動などにも自主的に取り組んでいる。しかしながら、学習面においては基礎的・基本的事項が確実に定着しているとは言えない実態がある。具体的には、教科書がスラスラと読めない、算数レベルでの計算ができないなど基礎学力が不足している生徒も比較的多い。

本校研究の経緯より

昨年度から、学力向上フロンティアスクールとしての研究が始まった。そのためには、まず私たち教員の指導力を向上させなければいけないと考え、昨年度の主題は「基礎・基本の徹底と、自ら学び考える力を育む授業の創造」とした。しかし、本年度の標準学力テストの結果を見ると大きな成果は見られず、逆に全体的には低下しており、生徒一人一人を見て十分に学力を向上させることができたとは言えない状況である。そこで、生徒の変容が目に見える研究とするために、研究主題もあくまで生徒に焦点を当てたものとした(「...生徒の育成」)。また、サブテーマも「...きめ細かな指導の確実な実践を通して」と変更した。少人数授業(習熟度別指導)をはじめさまざまな実践研究を深め、生徒一人一人に確かな学力を確実に定着させることを目指したい。

研究の概要

(1) 研究推進体制の工夫



- ・運営委員会(校長・教頭・教務主任・学年主任)
...毎日、職員朝会前に
- ・学力向上推進委員会(運営委員+研究主任)
- ・研究部会(研究主任、各研究部部長)
- ・教科部会...9教科、道徳、特活、総合
- ・学習環境部...生徒会活動の活性化、
潤いのある学習環境づくり
- ・基礎学力向上部...家庭学習、読書運動の推進
補充の時間のすすめ方
- ・資料調査部...アンケート、記録

(2) 研究の実際(評価の工夫・改善について)

評価活動の流れ

まず、教科ごとに様々な評価データを集める。具体的には定期テストだけでなく、感想文、小テスト、ワークシート、自己評価、実技試験、作品、行動観察などである。以上のデータをパソコンに入力し、表計算ソフトを使って評価を算出する。

評価算出の実際

ア 補助簿としての表計算データ

左下図は、2年生の理科、「電流とその利用」という単元の評価データをパソコンの表計算ソフトに入力した例である。2年5組の阿蘇北太郎さんのデータが入力してある。レポート、単元テスト、パフォーマンステスト、定期テストのそれぞれの結果を入力し、表計算ソフトにより集計、計算を行う。

「補助簿」の代わりとなる表計算シートなので、「評価規準(基準)」を表記。

つまずき(C評価)の内容を復習できるように、問題集等のページや問題番号を表記。

イ 個人カルテの作成

このファイル(ブック)はいくつかのシートを重ね合わせてできているので、「1学期カルテ」というシートを開くと、右上図のような「個人カルテ」が白紙の状態画面にあらわる。そこで、番号の欄に阿蘇北太郎さんの出席番号「2501」を入力すると、氏名の欄、評価の欄に阿蘇北太郎さんのデータを、他のシートから読み込んできて表示されるようになっていく。このようにして9教科分の個人カルテを作成する。

ウ 観点別評価、評定の算出

さらに、表計算ソフトを使って「観点別評価」及び「評定」を算出する。その算出結果を「通知表」の様式に合わせて印刷する。9教科分の「観点別評価」「評定」とともに、「所見」「特別活動や健康の記録」「総合的な学習の時間の記録」「個人カルテ」のすべてを全校生徒1人ずつ印刷して、クリアファイルに綴じ込んだものを通知表『はばたき』として学期末に配布している。

考察

評価に関しては、本年度通知表の形式を変更した。今までのように手書きの通知表では、データ処理の量が膨大になり、非常に作業が煩雑になってしまう。実際に観点別評価、評定の記入だけでさえ、学級担任は1500箇所記号や数字を転記しなければならない。教科担任が成績一覧表に転記することも考慮すると、1クラスで3000回の作業がおこなわれることになり、煩雑さだけでなく、その間に誤って転記する可能性も十分に考えられる。

そこで、本年度から手書きの通知表をやめ、前述のようにクリアファイルの通知表にした。その結果、作業量を激減することができ、多忙になりがちな学期末もゆとりを持って教育活動に取り組むことができた。

(3) 研究の成果と課題

研究の成果

ア 授業づくり

本研究が始まってから研究授業が増えたことが挙げられる。一昨年度までは年間3回だけだったが、2年間で約20回の研究授業を積み重ねてきた。今までの3倍前後に増加したことになる。その研究授業の積み重ねが、若いスタッフの学習指導や教材研究に対する意識を高め、研究の方向性も見えてきた。特に、「学習指導の4本柱(=あそきた学習)」を意識した授業づくりに取り組むことにより、教材分析、系統分析、目標分析を綿密に行って授業に臨もうとする意識が向上した。右図からもわかるように、生徒にとってもわかりやすい授業になりつつあると言えるだろう。

「個人カルテ」を作成したことにより評価に対する説明責任を十分に果たすことができるようになった。また、本年度は生徒のつまずきに対応できるように改善したので、その活用方法の研究を今後さらに進めていきたい。

